

ムスリム職業屠畜人のイスラーム的実践

オーストラリアの食肉工場での観察から

高見要（大阪大学）

本発表ではオーストラリアの食肉工場で働くムスリム（イスラーム教徒）の宗教的実践のあり方について検討する。日本の食肉工場がハラール対応を進めるヒムスリム屠畜人を雇用することになるが、その際に労働環境のムスリムフレンドリー化が必要であるとされる。食肉工場のハラール対応先進国であるオーストラリアでは、どういった設備が準備され、実際にどのように運用されているのか。発表者は2014年から2015年にかけて、オーストラリアの食肉工場でハラール屠畜人の一員として働く経験を得た。部外者の立ち入りが難しい食肉工場を内側から観察することで、ムスリム職業屠畜人内の実践の多様性を具体的に示す。

オーストラリアの人口は約2,300万人、うちムスリムは約60万人であり、ムスリム率は2.3%であるとされる。オーストラリアが食肉のハラール対応に注力する目的は輸出にある。2017年実績値によると、1年間に生産された牛肉の約7%、子羊肉の約11%、羊肉の約25%がイスラーム諸国へと輸出されている。食肉に関するハラール認証制度も主に輸出を対象としており、法的に政府認可ハラールプログラムとして整備され食肉輸出管理法の枠組みで運用されている。

ハラール屠畜人のイスラーム的実践を検討するにあたり、あるインド人屠畜人の語りを紹介することから始めたい。この語りにはハラール認証の一端を担うことで、自らのムスリム性を強く意識する姿勢が表れている。ムスリムにとってハラール認証付き食肉を生産する現場でハラール屠畜人として働くということはどういうことなのか、ハラール屠畜人は厳密にイスラーム法規定に従って生きる人々なのか。

まずムスリムが日々行うべきとされる規範について確認する。食肉工場で働く際に問題になる日常的義務は、1日5回の礼拝、金曜集団礼拝、人に見せてはいけない恥部についての規定、排泄後の清め（イスティンジャ）といったものである。イスラーム地域は広大であり、自然環境等により実践にも多様性があるが、上記の規定は基本的なものであり、多くの場合、各地の文化と結びつき広く共有されている。では食肉工場ではどのような実践が行われているのか。

ビクトリア州のA工場は羊・牛あわせて4ラインをもつ大規模な食肉工場である。カシミール人のHalal Inspectorが常駐し、エジプト人、パキスタン人、フィジー人、インド人、インドネシア人、ウズベキスタン人、ソマリア人など多様な背景をもったムスリムが屠畜を担っている。この工場の特色はカシミール人Halal

Inspectorの強い政治力と、「シェイフ（先生）」と呼ばれるエジプト人サラフィー主義者作業員の影響であった。ハディースを引用しながらイスラーム法規定について語るシェイフに感化され、ムスリムたちはより実践を重んじるようになっていた。

西オーストラリア州の人口4,000人ほどの町にある小規模なB工場では、ソマリア人によってハラール屠畜が担われていた。彼らは日々の礼拝は行っているものの、血の付いた服で、ブーツを履いたまま礼拝を行うといったような不徹底とも思える実践であった。比較的文化的に均質なグループであり、グループ内のイスラームに関する解釈の相違が表面化することはなく、取り立てて自分たちの敬虔さを誇示することも見られなかった。

同じく西オーストラリア州にあるC工場は、1971年創業の、羊に特化した大規模工場である。ここでは、ジヤワ島から南へ360kmほどに位置するクリスマス島やココス諸島がオーストラリア領となったことで流入したマレー系ムスリムがコミュニティを築いている。この工場の特徴は従業員に占めるムスリムの割合が比較的高いことである。町内にはモスクもあり、金曜礼拝に参加できるよう、金曜日は午前のみの操業となっている。

以上のように、それぞれの工場で文化が形成されており、異なった実践がある。食肉工場は都市から離れた小規模な町にあることが多く、ムスリムのコミュニティも小さくなりがちである。小さなコミュニティは強い個性をもったインフルエンサーによって大きく左右される可能性がある。

またハラール認証をうけたムスリム屠畜人は宗教に関する豊富な知識によって認定されているわけではない。一般的のムスリムと同様に、それぞれのイスラームに関する認識があり、それぞれの実践がある。その中で、イスラーム法により定められているとされる規定が守られていない場面や、イスラーム法で認められているとされる枠内のバリエーションが許容されず、「過剰」な要求がなされる場面もある。

ムスリム作業員の求めるイスラーム的設備や実践の水準はさまざまであり、文献的イスラーム法知識だけを完全に理解することはできない。実際の労働条件は、会社と作業員とのパワーバランスや交渉次第で決まることがあるが、受け入れ側にもイスラーム法的知識に基づいたポリシーとともに、作業員との個別の協議・信頼関係が必要である。

キーワード ハラール 屠畜 イスラーム 実践